



2024 年

4 月 第 1・2 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 4 月 7 日 ヨハネ福音書 20 : 24 - 29 .

『 信じて加わる者に 』

・ 4 月 14 日 ヨハネ福音書 21 : 3 - 13 .
(1 - 14)

『 再び網を打つとき 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

イエスの受けた裁き、処刑、埋葬、復活に関して最も詳しく記してあるのは、4つの福音書の中で一番最後に記されたヨハネ福音書です。実際の出来事から少なくとも半世紀、時間は経っていますが、キリスト教会はイエスの受難と復活に関して多くの情報をこのヨハネ福音書から得ています。歴史学にはよくあることとして、より古い記述の解釈もさることながら、あとから出てくる数々の新事実や新発見が、歴史的事実を補足し、より精緻なものに上げていくヒントとなります。

さて、キリストの復活は不特定多数に対してではなく、生前、何らかの関りをもったことのある人々に対しての顕現としてありました。先ずは女性たちの前に、さらには（ユダが一人脱落して）11人となっていた弟子たちではなく、もう一人が不在の時の10人の弟子たちに対してイエスは復活していたという新事実を伝えているのは唯一、ヨハネ福音書だけです。不在者はトマスで、一週間後に他の弟子たちと一緒にいる時に、漸く復活のイエスと出会えたことも、この福音書だけが書き記した史実です。トマスが一週間遅れで主の復活の証人となった事実は、他ならぬヨハネ福音書に基づいて、後のキリスト教会の復活節の聖書日課の中に取り入れられました。この他にもヨハネ福音書しか知らない事実として、イエスが木曜日の夕刻に弟子の足を洗ったことがあげられます。“洗足の木曜日”は今日、全てのキリスト教会の受難週の暦の中にあります。

さて、一週間遅れて復活の主に出会ったトマスの前に顕れた主の手には釘の跡が、また脇腹には致命傷と思われる槍に貫かれた刺し傷が、そのままありました。この傷が漸次、恢復したのか、それとも地上でいつまでものこったままだったのか、報告はどこにもありません。いずれにしても、トマスの（復活に対する）一時の疑いは晴れました。ただ、目の前で動揺の色を隠せないトマスにたいしてイエスは語りかけます。

私を見たから信じたのか。見ないで信じる人は、幸いである。

後の世に生きる私たちは全て、“見ないで信じる人”に該当します。

さなければ、見ないから信じられない人もいます。地球上では未だ後者が大勢を占めています。カトリック教会では、なぜか十字架上にとどまった生死不明のイエスの図像が尊ばれます。十字架刑そのものを疑う人には、説得力はあります。ただ、そのままで、復活が疑われ、疑問視されたら、全キリスト教会共通の信仰告白（＝使徒信条）には至りません。

…主は聖霊によりてやどり、おとめマリアより生まれ、ポンティオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府（よみ）に下り、三日目に死人のうちより“よみがえり”天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり…

—日本基督教団訳“使徒信条”（＝信仰告白）より抜粋

使徒言行録の１章２２節に、使徒の欠員を補充して１２人に戻すための選挙を実施する条件として、選出される使徒は“主の復活の証人で”なければならぬとしています。

さて上記の「使徒信条」で唱える主の死から“三日目”の当日に、復活の証人となっていたのは（女性たちを除き）「あなたがたに平安があるように」という復活者キリストのメッセージを直に受けとめた“使徒”たちでした（ルカ福音書２４：３６，ヨハネ福音書２０：１９）。場所は、おそらくエルサレムの潜伏先で、時間的に信条との整合性は成り立ちます。

さなければ、生前のイエスの予告（？）、または墓前にいた白い衣を着た若者（天使）たちの忠告、あるいは、復活の主と再会したか、乃至は“忠告”を取り次いだ女性たちの伝言も考慮すべきです。

すると、幾日か後に、イエスの復活日とその死から推定“三日目”であったことをどこかで確認し合った人々がいたことも考えられます。さて、後から信じて教会に加わる人は、誰の証言を信じたらよいのでしょうか…。

《 再び網を打つ時 》

イエスの直弟子（の一部？）が、主（イエス）の復活の後に、エルサレムを離れて、もと居たガリラヤに移動しています。彼らは空腹を満たすた

めか、湖で漁をしています。このエピソードもまたヨハネ福音書だけが書き記しています。

マタイとマルコの両福音書によると、イエスの復活後、伝言で“ガリラヤでの再会”を言い渡されていた弟子たちは、マタイを除き、なぜか使徒信条（上記）にあるとおり、イエスの死の“三日目に”エルサレムの潜伏先で復活のイエスとの再会を果たしていたようです。情報は錯綜します。

ヨハネ福音書によると、一度目の再会は彼らの潜伏先（エルサレム）で10人の弟子たちが、二度目も同じ場所でトマスを含めた11人（？）の弟子たちが再会を果たします。さらに三度目は、ガリラヤ湖畔で（7人？）の弟子たちが再会を果たしています（ヨハネ福音書21：14）。どういうタイミングで彼らがそこに移動していたのかは不明です。もしかしたら、エルサレムでの二度目の再会の後、姿を消した（？）イエスを追い求め、当初予定されていた復活後の“指定再会場所”のガリラヤに赴かざるを得なくなったのでしょうか？ 事の真相は不明です。

ガリラヤに移動して、おそらく幾日か経った後に、一部の弟子たちが漁を再開します。夜通し網を打っても魚が一匹も捕れなかったある朝のこと、そこに現れた一人の謎の人物が、彼らに語りかけます。

舟の右側に網を打ちなさい。そうすれば捕れるはずだ。

神の国を宣べ伝えること、人々を癒すこと。イエスが繰り返し弟子たちに命じていたのはこれらのことでした。神殿税の納付の是非を問われた時のイエスは、ペトロに「網を打ちなさい」ではなく、「釣り針をたれなさい」と言って、捕れた魚の口の中から銀貨を取り出したことはありました。ただ、魚を食するために網を打てと言うのなら、これはきわめて異例な命令です。取る物も取り敢えず、弟子たちはその人物の命令に従ってみると、びっくり仰天、引き上げられた網の中は大きな魚でいっぱいでした。この“奇跡”へと導いたのが復活のキリストであることに、弟子たちが気付くのは、さほどの時間はかかりませんでした。

困ったときの神頼みとは違います。困っている彼らに向かって、神が自ら救いの手を差し伸べたのです。祈ることさえ忘れていた彼らに対して。